

2014年度 社会科・地理歴史公民科における取り組み

Initiatives in Social Studies (Geography, History and Civics) in SY2014

社会科

秋山寿彦・来栖真梨枝・中村文宣・長谷川智大
藤木正史・古家正暢・前田陽子・山本勝治

要旨

本校は国際バカロレア (International Baccalaureate) の中等教育プログラム (Middle Years Programme) を導入しており、社会科はMYPのHumanitiesに相当する。本論文では、本年度開催された第4回公開研究会における授業実践および分科会の報告を中心に、本校社会科における2014年度の取り組みをまとめる。

1 本校社会科（地理歴史・公民科）の概要

(1) 目標

開校以来、本校社会科では、6か年を通して次の2点を目標に掲げ学習を進めている。これは、年度当初にすべての教科・科目に関して生徒に提示されている「学習内容と評価」のうち、社会科に関わるものである。

社会科では、6か年を通して、次のことを目標とし、学習を進めます。

- ①グローバル化が急速なスピードで進む今日、国際社会の一員として、現代社会の課題に興味や関心を持つ。
- ②現代社会の課題を地域で生きる自分の生活と結びつけ、多面的多角的に考え、自分のことばで表現していく力を培う。

社会科の学習では、具体的に次のような力を培っていきたいと考えます。

- 新聞やテレビで報道される社会的な出来事に対して知的好奇心を抱く力
- 地図や統計資料、年表や読み物資料、写真や映像資料等を読み解く力
- 社会的な事象に対する自分の考えを論理的な文章でまとめる力
- 学習した内容を、レポート・地図・ポスター・新聞などの形式に表現する力
- 習得した知識を活用して、社会的な事象について説明する力
- 持続可能な発展 (ESD) について、自分の考えを論理的にまとめ、表現する力

(2) 6年間のカリキュラム

6年間に開設している科目は下表の通りである。

なお、表中の※はイマージョン授業に関するものである (次節参照)。

	学年	分野・科目	備考	時間数・単位数	
MYP	第1学年	地理的分野※		3	
	第2学年	歴史的分野※		3	
	第3学年	歴史・公民的分野	歴史2時間+公民2時間		4
		イマージョン社会※	社会科的なトピック		1/2

MYP	第4学年	現代社会		2	必履修
		世界史 A※	19世紀を中心とした世界史	1	
(DP)	第5学年	世界史 A※	20世紀を中心とした世界史	1	選択 必履修
		日本史 A	近現代日本史 (19世紀～現在)	2	
		地理 A		2	
	第6学年	世界史 B	前近代世界史 (~18世紀)	4	自由 選択
		日本史 B	前近代日本史 (~18世紀)	4	
		地理 B		4	
		倫理		2	
		政治・経済		2	
		IM 政治・経済※		2	
		歴史特講 (世界史)		2	
		歴史特講 (日本史)		2	
		地理特講		2	
		国際 A	憲法と人権	2	

(3)イマージョン授業 (英語による授業)

社会科ではイマージョン授業を次のように展開している。

○プレ・イマージョン (第1学年・第2学年)

年間授業のうち1~3つのトピックにおいて、英語による授業を実施している。

○イマージョン (第3学年)

年間を通して週1単位時間を「イマージョン」として開設している。数学科・理科・社会科・美術科などの教科的な内容について年間4テーマをローテーションで英語により学習する。

○イマージョン世界史 A (第4学年・第5学年)

日本語による世界史 A と同時開講で、いずれかの科目を選択して履修する。

○イマージョン政治・経済 (第6学年)

日本語による政治・経済とは別時間枠で開設している。

2 第4回公開研究会を振り返って

(1)社会科が考えるグローバルスタンダードに立脚した中等教育の「学びのあり方」

第4回公開研究会は2014年6月12日(土)に本校にて開催された。本研究会では研究テーマを『グローバルスタンダードに立脚した中等教育の「学びのあり方」』とし、サブテーマに『多様な学習評価から設計する探求型授業』が設定された。

本校は開校以来、立脚すべき「グローバルスタンダード」の具体的な形を表すものとして、国際バカロレアの MYP を導入し、教育活動を行ってきた。国際バカロレアの基本的な考え方や特徴は、現代社会で求められているグローバルスタンダードと関連する部分が多く、まさに世界標準の学びのあり方の一つとして考えることができよう。こうした MYP の学習システムを運用していく中で、社会科は前述した目標に定めた能力の育成を行ってきた。

MYP における大きな特徴の一つが世界共通の評価規準である。社会科では MYP の対象学年である第1学年から第4学年で MYP の評価規準を用いた評価を行うことに加えて、MYP 修了

後も MYP の評価規準に準じた独自の観点別評価を用いて評価を行っている。こうした 6 か年を見通した学習評価の取り組みは、グローバル化する社会で活躍できる人材の育成を目指す上で大きな意味を持つと考える。本研究では、社会科が行っている授業実践において、どのような学習評価を行っているのか提示することとし、特定の学年に絞るのではなく、可能な限り 6 か年が見通せるよう第 1 学年から第 5 学年まで、すべての学年において公開授業を実施した。この中には、本研究において、ESD・国際教養として設定された授業も含まれている。

なお、授業の概要は次の通りである。

学年	教科目・領域	授業者	単元・題材・主題
第 1 学年	ESD 社会 (地理)	古家	「ジェノサイドからアフリカの奇跡へ」
第 2 学年	国際教養	秋山	新聞スクラップ活動からアプローチする ESD&AOI
第 3 学年	ESD 社会 (公民)	古家	「フクシマ」から「福島」を取り戻す
第 4 学年	現代社会	長谷川	日本国憲法の人権保障
第 5 学年	世界史 A (IM)	来栖	World History A, a DP History approach
	世界史 A	山本	DP History を意識した世界史 A
	日本史 A	藤木	史料から読み解く日本近現代史
	地理 A	中村	地図から読み解く世界や地域

(2)社会科における評価規準

国際バカロレアの定める評価規準はそれぞれの規準に対して複数の評価材料を用意することが求められ、また評価方法も評価基準に見合った複数の方法を用いる必要がある。したがって、教師は試験による評価だけに留まらないさまざまな評価方法を用いると共に、評価につながるさまざまな学習方法を各科目の授業で取り入れている。

①第 1 学年～第 4 学年 (MYP) の評価規準

- 規準 A：知識と理解 (Knowledge and understanding) …8 点満点
- 規準 B：調査 (Investigation) …8 点満点
- 規準 C：批判的思考 (Thinking critically) …8 点満点
- 規準 D：コミュニケーション (Communicating) …8 点満点

規準 A～D の観点ごとの点数を合計した 32 点満点を、次のように換算して 7 段階評価を出していた。これは MYP で決められた換算である。

7 段階	7	6	5	4	3	2	1
規準の合計	32-28	27-23	22-18	17-13	12-8	7-4	3-0

各学期および年間の MYP 7 段階評価のほか、1～3 年生では年間の 5 段階評定、4 年生については各学期の 5 段階評価と年間の 5 段階評定も出している。5 段階評価・評定と MYP7 段階評価との関係性については科目系統や授業担当者によって異なるが、観点別評価に基づいて 5 段階の評価・評定を出している点は 7 段階評価と同様である。

②第 5 学年～第 6 学年の評価規準

社会科では MYP の対象学年ではない第 5 学年と第 6 学年においても MYP に準じた本校独自の評価規準を用いて評価してきた。MYP に準じた本校独自の観点別評価を用いることによ

り、生徒が4年次までと同じような形で評価を振り返り、学習活動に役立てることができるよう配慮している。なお、科目系統ごとに観点の重み付けを変えているが、3 観点の合計が 24 点満点であることは共通している。学期ごとに 10 段階評価を示し、年間については 5 段階評定を出している。10 段階評価および 5 段階評定との関係性については、科目系統や授業担当者によって異なる。

科目系統	世界史	日本史	地理	公民
科目	世界史 A 世界史 B 歴史特講（世界史）	日本史 A 日本史 B 歴史特講（日本史）	世界史 A 世界史 B 地理特講	倫理 政治経済
規準 A：知識 (Knowledge)	12 点満点	12 点満点	8 点満点	8 点満点
規準 B：概念 (Concepts)	8 点満点	6 点満点	10 点満点	12 点満点
規準 C：スキル (Skills)	4 点満点	6 点満点	6 点満点	4 点満点
3 観点の合計	24 点満点			

(3)分科会報告

公開授業終了後には社会科分科会および ESD・国際教養分科会が開催された。分科会は指導助言者として成田喜一郎先生（東京学芸大学教職大学院教授）にお越しいただくとともに、公開授業にお越しいただいた先生方にも、両分科会あわせて 70 名近く参会していただいた。このためか、分科会では非常に活発な議論がなされ、設定された時間では足りなかった。分科会終了後も各授業担当者と個別の質疑応答が研究会終了間際まで行われた。成田先生をはじめ、参加していただいた先生方に改めて感謝申し上げたい。

分科会では、公開授業の中で示された資料（史料）について、その提示方法や教師による資料（史料）の取捨選択に関する質問が多く挙げられた。また、本研究会のテーマにもある学習評価と授業内で行われた資料（史料）を用いた学習活動とのつながりについても意見が交わされた。特に本研究会で行われた世界史 A の授業は、本校が準備を進めている DLDP（日本語デュアルランゲージ・ディプロマ・プログラム）を念頭に、MYP と DP の接続を意識した授業実践であったこともあり白熱した議論が繰り広げられた。さらに、多様な学習評価に関する議論では、いわゆる講義形式の授業ではなく、レポート作成や生徒個人の調査活動に基づくプレゼンテーション、論理的な文章作成を意識した新聞投稿や各種作文コンクールへの応募など、各授業担当者が行っている実践例も数多く紹介され、よりよい社会科教育を目指した意識の共有が図られた。

分科会の最後には、指導助言者の成田喜一郎先生からは社会科を通してどのような力を育んでいくのか、以下の 6 つが示された。

- ①コミュニケーション能力
- ②体系的な思考力
- ③代替案を伴う批判的思考力
- ④情報収集・分析能力
- ⑤持続可能性につながる価値観を見出す力
- ⑥その他（目前の児童生徒に必要な力）

社会科ではグローバルスタンダードに立脚した学びのあり方を提示できるよう、今後の公開研究会に向けてさらに研究を深めていく所存である。

Abstract

We have introduced the International Baccalaureate Middle Years Programme, which defines social studies as MYP Humanities. This article reviews the initiatives undertaken by the social studies department in SY2014, focusing on the teaching practice demonstration at the Fourth Open Seminar held this year and the reports submitted to breakout sessions at the Seminar.